

なんでも、祭りの時には峠下までバスをあげているという。だから、そこまでは行ってみましょうということになった。

この日は雨模様で、断続的に雨が降っていた。高山では、12時ごろにどしゃ降りとなり、生徒たちはよもや歩くことはないだろうと、確認を求めた。しかし、こちらとしてはこの旅行の中核をなす場なので、容易なことではあきらめたとはいえない。もう少し様子を見ようとしかえなかった。

そう思っていたときに、バスが行けるかどうかわからないというのだから、こころの動揺は覆うべくもなかった。いざ、野麦街道に入ったときには、何しろ行けるとことまで行こう、といった気持ちだったので、再々度”歩かないよね”と聞かれると、”何しろバスで行けるところまで行く”と答えてしまった。

突然バスが止まって、ここが峠下らしいという。標識がある。まずはそれを見ようとバスを降りた。

なんと、旧野麦街道が保存されているという。保存区間は1.3キロメートルとある。ただ、現在地が明記されていないので、峠までの実距離がいくらかわからない。

大分迷った。バスの中で大半の子どもは眠っている。まして、バスで行くと答えてもいる。ここで歩こうといたら、総反発を食うと思った。しかし、昔の街道がそのまま残っている。そのこと自体私も知らなかった。ここで、反発をおそれて引き下がったら生涯の悔いが残ると考えた。

何分歩くか確たるものがなかったが、1時間を超えることはなかろうと、子どもたちをおこした。まさかと思ったのだろうが、

一言二言文句をいって、大半の生徒はバスを降りて歩き始めた。だが、やはりいるものだ。バスを降りない子どもが5人いた。無理やりおろして、一緒に歩き始めた。

途中、”山登りをするなんって言わなかったじゃないか”と責められる。”こんな山じゃない”と言いつつも、けっこう急である。こんな道を10才前後の子どもたちが行き来したのだと思うと、胸が熱くなった。生徒たちは出した言葉とは別に同じように感じていたのではないかと、自分を納得させた。それ以上に悪態をつかないところにそれを感じたわけである。

結局、40分くらい歩いた。それでも、飛騨から岡谷までの道のり、130キロメートルのなんと100分の1だ。それを知った子どもたちは絶句した。

歩こうと決断したとき、峠までバスが上がってくれるかどうか、気になったところである。何しろ、バス会社でも、この峠下までだ、といている。その、迷いの気持ちを察してくれたのか、運転手さんが、行けるまで行ってみましょうとってくれた。万が一には同じ道に戻ってくるつもりになって決断をしたが、峠にバスの姿があることを願ったのはもちろんのことである。

峠は小雨が降っていたが、私の先を歩いていた子どもが、”バスがいる”と叫んだときにはころからほっとした。

おみねの像の前で、全員の写真を撮った。このときにも、写真に入るのはいやだというものが出るのはないかと気にしたが、そのようなことはなかった。

その後も、小雨の中を歩いたことをうら

むような言葉はひとつも聞こえてこなかった。

こうして、私の中でこの旅行の中核をなしていた野麦峠を自らの足で踏むことが、旧街道に足跡を残すというおまけもついて実現したわけである。

なお、野麦街道の川浦から先は「大型車禁止」だった。運転手さんに感謝するのみである。

<後日談>

この夜、生徒が何人か、部屋に語りに来た。この、野麦峠行き裏話をしたら、えらく気に入られた。旅行が、しつらえたものではなく、動きのあるものだということが実感されたのだろう。もともと、「そんないいかげんな！」と責める言葉も出た。このような会話の中で、気持ちの通じた「対話」が成り立ったように思ったのは思い過ぎだろうか。

この後、松本市に移築された峠の茶屋により、蚕糸博物館を見学して、製糸工場に向かった。

<宮坂製糸>

今回の研究旅行は、ここに至るよう配置してきた。「そして、チュちゃんは村を出た」を見る、「ああ 野麦峠」を読む、そのVTRを見る、野麦峠を踏む。これらが、現代の製糸業にどのようにつながっているかを見たかったのである。

平屋の3棟のこじんまりとした工場。宮坂さんが、笑顔で迎えてくれた。

子どもたちは、製糸工場にいったら、VTRで見た宮様のように臭いでもどすだろ

うと冗談をいつていた。やはり、臭いに襲われた。とくに、残されたさなぎの臭いに閉口したらしい。鼻を押さえたものもいるが、逃げ出すものはいなかった。

宮坂さんは、中庭に生徒を集めて、概略を話してくれた。ここでは機械製糸と座繰り製糸をしていること。後者は、おそらく日本で唯一であろうこと。工程など。

さっそく、座繰りの職場から見せてくれた。二列に座繰りの装置が並び、平均年齢50～60才のおばあさんが7名ほど働いている。われわれ30名全員が入ることができないくらい手狭である。蚕糸博物館で見せてくれた作業が生産として実際に行われている。子どもたちは、じっとおばあさんの手先を注視していた。何を考えながら見ていたのだろうか。こちらが声をかけるまで、見続けていた。かなり、臭う中においてでもある。

次に、機械製糸を見た。糸の太さを感知するセンサー、それに応じて接緒する繭の糸を引っ掛ける装置、そして、それを巻き取っている糸に接緒する装置を見せてくれた。製糸工女のしなやかな指先が機械化された原理はなんとなくわかったが、どうしてうまくいくかまでは理解できなかった。

その後、中庭で機械製糸と、座繰り製糸の違いを中心に説明を受けた。同じ量でも、重さがかなり違うことを、実物で教えてくれた。機械製糸の方がずしりと重かった。したがって、座繰り製糸のふわっとした感じが求められるところだという。ちなみに一束機械製糸で3万円、座繰り製糸だと5万円だという。宮坂さんでは、座繰り糸一日2束生産しているという。

宮坂さんは、あらかじめお送りしておいた生徒のレポート集と「ああ 野麦峠」の感想文を読んでいてくれた。その感想を、生徒の名前をあげながら話してくれた。これには、子ども達も感動していた。あのおしゃべり好きの子どもたちも、屋外で、決して大きな声でない宮坂さんの話しを真剣に聞いていた。このように接してくれた宮坂さんにここからの感謝の念がうまれたのは私だけではないだろう。

宮坂さんは、岡谷の製糸業のこと、製糸業のみならず、繊維産業のことも話してくださいました。すぐには理解できることではないが、日本の近代化を考える上で、比較対象の原点におかなければならないことだろう。 —後略—

この旅行の中で生徒たちが何を考えたか知ってもらうには彼ら書いたレポートを紹介することが最も適切だと思います。読んでみてください。

川瀬 敦人

はじめに

今回の旅行は、中学の時の修学旅行と違って、数週間も前から待ち望むという感じではなく、あわただしく用意をして出かけたという感じだった。

僕はどこへ行くのかも知らなかったし、旅行の目的というものもまるでなかった。そんな気持ちで行った研究旅行だったけれど、とても貴重なものを見せてもらったと感謝している。どこがよかったのかは後で書くけど、人間の技術が進む中で、進んでいる新しい技術と、昔ながらの技術とが闘

いながらも互いに吸収しあっているところが伺えた。こういった対比は実におもしろく、興味の深いところですよ。何の気なしにとった選択で、何の気なしに行った旅行でこんなによい旅行を送れるとは思わなかった。

<トヨタ工場>

トヨタの車の工場だったのでやはりどこも流れ作業だった。部分部分で別れていて、効率よく仕事を進め、一日にたしか数千台をつくるということだった。

トヨタに行って、一番感じたことは、車をつくる工場のところ、一般の人達に対するサービスなど、そういう分野分野に細かく分かれていて、その分野での仕事が、下の方までよくいきとどいているなど思った。やっぱり大きな会社は、組織がしっかりしていて最も効率がよい方法は何かということをもいつも研究しているものなのだなと思った。

トヨタのカローラは大衆車で、ホンダのシビックといつも生産競争をしている車です。車で一番売りあげが取れるのはやはり大衆車だからより親しみを一般の人に持ってもらえるように見学の設備がよくできているのかなと思った。それに車ができる過程というより、カローラが造られる過程を見学したような気がした。このような経営のうまさコンパニオンさんの美人さが目についた。

<製糸工場>

僕は初めてまゆから糸を取るところを見た。これは本当にうれしかった。まゆからああゆう原理で糸を取ることを知れたのがよかった。

僕らが見学したところは、かいこからやっているところではなく糸を取れるだけだったが、随所に機能的に分かれているところがあった。

最初なぜ手作業で取るのと、機械で取るのとで分けているのかと思ったが、出来上がった絹を持ってすぐに分かった。手作業で取った絹は機械でとった絹よりも数倍も軽かった。見た目はほとんど変わらないけれど、あの差は着たときに相当あると思った。やっぱり、どうせ絹のものを買うのなら手作業の方を選びたい。

けれどその手作業の工場で働いているのは、60を過ぎたおばあさんばかりで、若い人の姿などまったく見なかった。この後の日に東芝に行ったけれど、たしかにこんな単純な手作業よりも労働条件もいいし、普通に考えたら10人中10人が東芝に行きたがると思う。でもそこに手伝いに行くくらいの人がいらないのになと思った。だれが見たって機械の絹より人の手でつくられた柔らかくて軽い絹の方がいいに決まっているのだから。

僕はあの経営しているおじさんにとっても魅力を感じた。僕が魅かれたのはあの言葉では言い表せない笑顔だった。東芝の説明してくれたおじさんの笑顔には、今どんどん進出している東芝のバックがあって誇り高げな感じだった。製糸工場のおじさんに会っていなければこんな印象は受けなかったと思う。製糸業がどんどん低下していった中で、あせりも感じられなかったし、あきらめも感じられなかった。悲しみはあると思うけれどそれほど深くは感じられなかった。結局あの目は何だったんだろうと

思った。なんて言ったらいいのかわからないけれど、近代の工場では絶対に出会えないもので、昔ながらの製糸業、そしておばあさんたちの雰囲気、仕事の雰囲気から生まれるのだなと思った。それとどうせ仕事をするなら、そんな雰囲気の中であんな目になれるようなところで働きたいと思った。

<全体の感想>

この旅行で一番よかったと思えるところは、近代の工場と昔ながらの工場とを対比させて見れたところだと思う。トヨタ工場を見たときと製糸工場を見た後に見た東芝の工場とでは、見るときの意識がまるで違った。例えば製糸工場が東芝に勝てるころはどこか。また、どちらで仕事をする方が（気分的に）楽でやりやすいのか。自分にはどっちの雰囲気の方が自分にあっているのかなど、トヨタを見たときは全然違っていた。何気なく行った旅行だったのに、得るものが多かった。

もう一つ感想を紹介します。三屋えりさんです。

今回、私は、今、一番進んでいる機械と、どんどん失われていく古い方法、正反対のものを見学しました。

機械も、これからの未来には必要でしょうが、私の心の中に残ったものは、古いものでした。

今、なんでも、機械化になっていっています。町田や鶴川の駅でも、自動改札にする工事をやっています。

便利になることは確かだが、このまま進み続けるとどうなるのだろうか疑問に思

う。

機械人間などが造られるだろう。

だが、時代がどんどん新しく変化していく中で、昔の古い方法を受け継いでいる町や工場がある。

私はこの旅行で、時代に惑わされて、何か大切なものを忘れていないことに気がついた。新しくなっていく時代の中で、古い物をもっと大切にしなければいけないと感じた。今は、古い物は捨てる時代になってしまい、私達ぐらいの世代はそれが当たり前だと思っっている。

この旅行で、私は古い物のよさを知り、あたたかさを感じた。

あと、2、30年後にも、あの町やあの工場がそのまま残っていることを望んでいる。

一人の生徒が宮坂さんにお礼の手紙を書きました。ここにも、これまでに得られなかったものの見方、考え方をつかみつつある姿が見えるように思います。

宮坂さんへ

だいふ秋らしくなってきましたが、宮坂さん、お元気ですか？

先日の研究旅行の時には、お忙しい中、大変お世話になりました。学校で事前に勉強し、「あゝ野麦峠」を見ていた私たちにとっては、宮坂さんの仕事場は、まるで映画の中からぬけ出してきたようでもあり、旅行中いろいろ見学した中で最も強い印象を持った人もいたようです。

実を言うというと、私は自分の感想文が送られていたとは思っていませんでしたので、宮坂さんが私の「あゝ野麦峠」の感想

文について、お話ししてくださった時には、びっくりすると同時に「ジーン」としてしまいました。私の聞いたかった『絹糸で生きる人』の声を聞くことができたからです。そのことが本当にうれしく、オーバーかもしれませんが「一生の思い出」になると思いました。

宮坂さんの絹糸へのこだわりと、努力が私だけではなく、みんなの心に響いたと思います。

私達は、半年間「現代社会と技術」というテーマに沿って勉強してきましたが、あの旅行で自分たちの目を見て、そして宮坂さんの話を聞かせていただいたことによって私たちの求めていたテーマのカギが見つかったような気がしました。私たちには、理解できないくらいの苦勞もあるでしょうが、どうぞ”岡谷の宮坂製糸”という誇りを持って良い糸を作ってください。

そして、もしも来年私達の後輩たちが勉強する時には、ぜひ、又、仕事場を見せてあげてください。

それでは、お体に気を付けて、みなさんによろしく。

和光高等学校2年5組 中村めぐみ

このように、1991年度に出発した選択科目「現代社会と技術」の研究旅行は終了し、授業も終わりましたが、生徒たちに何が残りつづけるか、今の段階ではわかりません。しかし、生産の現場に携わる人々に接して、それまでの生活の中では得られない、自らを振り返えざるをえない何かが残ったのではないのでしょうか。